六義園に見る安永・天明期の「庭見物」

“Garden Visit” at the Anei-Tenmei Era in Rikugien

小野佐和子*
Sawako ONO

摘要：大和郡山藩主柳沢信鴻が致仕の後記した『宴遊日記』をもとに、安永・天明期の六義園での庭見物の様相を明らかにする。六義園では、家臣とその家族、奉公人とその親族、信鴻と交友関係にある者、さらには信鴻と直接関係のない部外者の庭見物が認められる。部外者は、藩の関係者を仲介に庭を見物し、その数は、安永9年（1780）以降著しく増加する。その理由としては信鴻が菊花壇を設けて見物を誘ったことと、当時の郊外の遊覧の盛況が考えられる。様々な人が見物に訪れる庭は、外部に閉じた構造をもつ大名屋敷が、外部の人々を導きいれ、外部社会と交わる装置の役割を果たしたと考えられる。

1. はじめに

江戸の「大名屋敷は表面的・形態的には、外に対して空間を厳しく閉鎖しているように見える」¹⁾。なぜなら、大名屋敷は表長屋や塀で敷地を囲繞し、通行規制をもうけて人の出入りを制限していたからである。大和郡山藩の駒込の下屋敷も、堀と藪が屋敷を取り巻き、出入口は施錠されていた。安永2年（1773）の致仕の後この下屋敷に住んだ大和郡山藩二代藩主柳沢信鴻（のぶとき）の『宴遊日記』²⁾が、安永8年（1779）1月18日に「七過より北郊閑歩（中略）お隆藪より見んとて藪口の鍵取りにやる故手間取」と記しているのは、下屋敷の閉鎖性の一端を物語る。

大名屋敷の内部はさらに、「御殿空間」（大名とその家族らの儀礼・生活空間および藩庁諸機構）と「詰人空間」（江戸詰藩士らの生活空間）の二元的な要素から成り、空間的階層性を持つと指摘されている³⁾。駒込の下屋敷にも江戸詰め藩士とその家族が住む長屋が設けられており、御殿空間に属する六義園への出入りは、長屋の住人には禁じられていた。『宴遊日記』安永9年（1780）9月1日の条には、「お隆同道惟・栗を拾ふ、家中男児・こもり等来在ゆへ路次メりを申付る（中略）長尾を滝方へ遣し遊芸門出入固く申付る」、天明元年（1781）3月24日には「園中へ婦人女子等来り、願なき故尾沢に命し園中を出だす」、天明2年（1782）6月14日には「園中へ男二人少年一人出るゆへ咎めて出し子細を問へハ、板すり萩斎連出る由云ゆへ見する」と、許可なく園中に立ち入った者たちを園外に出したり咎めたりしたことを記している。六義園は屋敷の外に対して閉じた空間であると同時に、屋敷内の詰人空間に対しても閉じた空間であった。屋敷内で仕事の木版刷りの職人を咎めだてたことは、仕事で訪れる職人たちにも六義園への自由な立ち入りは禁じられていたことを示す。

しかしながら、上の記事は、園内への出入りが制限されていたこと、園中の人の出入りに信鴻自身が注意をはらっていたことを窺わせると同時に、物理的には庭に入り込むことが比較的容易だったらしいこと、庭に入り込む者たちがまみ見られたこと、さらに、「願い」があれば、あるいは信鴻に庭を見せる気持ちがあれば、庭の見物ができたことをも示している。事実、日記中には、「庭を見する」「園中見する」「園中召連」といった記述が散見する。柳沢信鴻が庭を見せたのは、家臣や奉公人の親族、信鴻と交友関係にある者といった信鴻の関係者だけでなく、幕府の役人及び他藩の武士とその家族や町人、数は少ないが農民等である。このこ

とは、当時、下屋敷であり隠居所であるとはいえ大名の庭は人々が見物に訪れる場所であったことを示している。

本稿では、『宴遊日記』をもとに、安永2年から天明4年までの10年間の六義園を例に、当時の「庭見物」の様相をあきらかにする。なお、大名の私園の江戸住民への開放はすでに水戸藩の後楽園について佐藤が触れ、公園の前身として位置付けている⁴⁾が、その具体的な様相は明らかにされていない。

2. 「庭をみせる」

安永2年（1773）5月、信鴻の駒込移転からほどなく『宴遊日記』に六義園見物の記事が現れる。移転から4日目の27日に「正平・喜太夫・助衛門に庭を見せる」、29日に「新介来、庭をみせる、迹より友諒召連行」、30日には「折衛門・満蔵・小兵衛・沖衛門に庭を見せ、夜食を与ふ」とある。

27日に見物したのは家中の者としかわからないが、29日の新介は出入りの本屋、信鴻が同行した友諒は信鴻の隠居の手続きを進めた上級職にある家臣でこの日は移転後初めての下屋敷訪問であった。また、30日の折衛門・満蔵・沖衛門は簡単な大工仕事に従事する家臣で、この日鉢植えの覆いを作りあげている。「庭を見せ、夜食を与ふ」とあるので、この庭見物にはねぎらいと報償の意味が含まれていたと見ることが出来る。移転早々、それぞれに身分の異なる者たちがあいついで庭の見物をしていることは、信鴻にとって庭が植木の手入れや花見・舟遊び等を行い、俳諧興業を催す場であるばかりでなく、「見せる場所」でもあったことを物語る。

まず、信鴻の下屋敷移転から3年目の安永4年（1775）を例に、庭見物の有り様を見てみたい。この年は6月に表住居が完成し、大がかりな普請が一応終了する。駒込での生活が軌道に乗りだしたと見てよいであろう。この年の庭の見物件数は39件、信鴻が庭を見せたのは、大別すると、藩士とその家族、侍女や雇い人の親兄弟、その他となる（表1）。数人での見物もあるが、一人が多い。藩士では、江戸勤番の藩士が江戸到着の後下屋敷に挨拶に訪れたときの庭見物が目に付く。勤番の挨拶に訪れた藩士たちに庭を見せることは恒例であったようで、この後も、安永6年（1777）7月、安永8年（1779）7月、天明3年（1783）5月のように、参勤の一行が江戸に到着した月には江戸詰めになった藩士が下屋敷を訪れ庭を見物している。

江戸勤番の者達に庭を見せることは、和歌山藩の上屋敷西園に

*千葉大学園芸学部

表－１ 安永４年の訪問者

月	日	見物者	藩士と 家族	奉公人 親族	その他	備考
2	9	渡辺宗左衛門	●			
	23	さえ中			●	目見
	11	弓				召連園中廻る
3	15	意仙			●	茶畑甘餅遣す
		藤市			●	胡弓の師
	26	新井従弟	●			
4	8	家中妻子	●			灌仏故
	10	米貫			●	召連庭を廻る
	12	りを息		●		
	13	仙宅小泉の親族	●			
	18	雪溪			●	珠成召連出
	24	袖岡伯母		●		
	25	堀義豊	●			和韻持参
5	12	珠来、龜岱			●	
		玄杏	●			連れ園中廻る
	13	森七郎左衛門	●			
	29	珠来龜岱吾十鳥道			●	兼約、庭見物
6	29	多福寺			●	
7	19	せつ兄		●		せつ同道廻る
8	2	里			●	目見
	24	礼姉嬢		●		
9	5	山岸惣兵衛	●			参府
		高橋伝次	●			参府
		長沢牛衛門	●			参府兵部使
		小十郎	●			参府
	7	半次郎喜左衛門	●			
	9	安元藤衛門	●			使に來達
	10	高山弥作	●			参府
	14	大山郡衛門外	●			甘餅遣す
	16	落合	●			
10	2	米駒妻の妹	●			
	7	菊貫三花太素外			●	俳諧
	8	谷母		●		谷母を連廻る
11	1	珠来・米叔			●	俳諧
	9	銀鷺			●	俳諧
	22	円通寺大通寺伴僧			●	寺嶋願
	25	大山	●			上邸より使
12	1	山村	●			上邸より使
	3	中村富蔵	●			上邸より来
閏12	11	銀鷺			●	俳諧

ついて、『南紀徳川史』が「此苑容易拝観を得すと雖も紀府より供奉乃至勤番の士は請願之上允許せらるるを恒例とす」⁵⁾と記している所以他藩でも例のないことではなかった。六義園の場合、藩士が特に願い出たのか、あるいは信鴻の意向で見物させたのかはわからない。

9月の長沢牛衛門、安元藤衛門、11月の大山は、上屋敷や藩からの使者である。長沢牛衛門は国元にいる息子信復からの使いであり、大山は上屋敷にいる娘ものの婚姻の日取りが決まったことを知らせに來た。新堀の屋敷に住む母や、六本木の姉光子からの使者、あるいは息子の養家、娘の婚家からの使者が庭を見物している年もある。この場合にも褒賞的な意味合いが含まれていたと考えられるが、使者すべてに見せる訳ではなく、その契機は不明である。家族の関係では、養子に行った息子達、嫁に行った娘達の下屋敷訪問に随った供の者に庭を見せることもある。これらの使者や供のものに庭を見せることは、報償としての意味合いのほかに、後ろ盾としての実家の豊かさや権勢を目のあたりにさせる働きを有していたことは十分考えられる。また、親しい大名の使者や供の者、あるいは出入りの芝居茶屋や料理屋からの使いの者に庭を見せてもいる。

2月9日に「渡辺宗左衛門來、寢間に逢、庭見せる」、4月25日に「堀義豊來、和韻持参、園中をみせる」とあるように、この年、藩士は何らかの役目で下屋敷を訪れた折に庭を見物している。しかし、安永2年(1773)10月10日の日記には、「森泰二郎庭見物來」の記述があるので庭見物を目的に下屋敷を訪れる

家臣もいたことになる。

藩士の家族も庭を見物する。この年は4月8日の灌仏の日に家中の妻子が庭を見物している。灌仏の庭見物については後に触れるので、この年前後の、灌仏以外の家臣の家族の庭見物を見ると、安永3年(1774)9月26日、奥居間棟上げの祝いに集まった「家中児輩数十」に庭を見せ、安永6年(1777)には、3月6日に、家臣の妻女総じて十余人が土筆摘みに來たので庭で会い、茶や煎餅などを与えたとあり、8月29日にも「昼穴沢妻やさ米栗を拾ふ」と、家臣の妻たちが土筆摘みや栗拾いに訪れたことを記す。安永7年(1778)9月24日には「側向妻子に園中見せ昼過より皆來る(中略)新井妻庭見物に來る」また、安永9年(1780)4月2日にも「今日長屋妻女等園中見する」とあるところから、側近の家族や長屋に住む者たちに日を決めて庭を見せていたことがわかる。

家臣の親族も庭見物に訪れており、安永4年(1775)には、3月に「新井従弟」、4月に「小泉の親族」、10月に「米駒妻の妹」の3件が認められる。

奉公人親族の庭見物で最も多いのは、侍女たちの近親の者である。新規召し抱え、暇ごい等の節目節目の挨拶に訪れた親たちを初めとして侍女の親兄弟の庭見物は多い。安永4年(1775)には、りを息、袖岡叔母、せつ兄、礼嫂、谷母が訪れている。いずれも、息子、叔母、兄、嫂、母と侍女と近い関係にある者であり、家臣の親族の庭見物とは性格が異なることを窺わせる。また、安永5年(1776)2月15日に「たよ姉庭見物願ひ、見せる(中略)庭見物願ふゆへ見せる」とあるところを見ると、特別に願い出て庭を見物する者もいたらしい。なお、侍女は藩士の娘を召し出す場合と、他藩の藩士や町人の娘が奉公に出る場合がある。したがって、その近親者には、武家ばかりでなく町人もいたことになる。

その他のほとんどは、信鴻と親交のある者である。まず俳諧関係者がいる。銀鷺(姫路藩主酒井忠以)・菊貫(松代藩主真田幸弘)三花(摂津麻田藩主青木一貞)といった大名、珠来・吾十といった宗匠は俳諧興業の合間に庭を楽しんでいる。ただ5月29日の珠来一行は、「兼而予ハ不逢様ニ珠来より願來故不逢」と信鴻抜きでの見物を希望し、2時すぎから夕暮れまで庭で過ごしている点で、他の人々とは異なっている。ついで、芸人の藤市と絵師雪溪がいる。芝居好きの信鴻は、侍女を召し抱えるときも踊りや浄瑠璃の芸をみて決めており、目見の二組はどちらも踊り目見(めみえ)の娘たちである。そのほかには、信鴻との関係は不明だが多福寺の僧が庭を見ている。

安永4年(1775)前後に限って、藩士や奉公人の親族以外で庭を見物した者を見てみると、安永3年(1774)に出入りの芝居茶屋猿屋の使いの仙二郎并僕(1/13)、安永5年(1776)には、俳諧に訪れた銀鷺(酒井忠以)の刀番(2/16)、暇をとった侍女ではないかと考えられる塩を迎えに來た森田の手代(3/11)、吉原の幫間の今春平吉(12/6)が認められる。芝居や踊りの関係者が多いし、使いや供の者も認められる。信鴻の元に出入りする様々な人々が庭の見物をしているといえる。

さて、この安永4年(1775)に庭を見物した内で、11月の円通寺と大通寺の僧達が唯一信鴻と直接関係がない。彼らは駒込片町の寺の僧で、3人連れであった。「寺嶋願」とあるから、藩士を通じて庭見物を願い出たのであろう。このことは、この時点での庭見物の者はほとんど信鴻の関係者で占められていたことを物語ると同時に、部外者も願い出れば庭見物が可能であったことを窺わせる。事実、次節に見るように、部外者の庭見物は次第に増加していく。

3. 見物人の増加と多様化

『宴遊日記』に記された10年間の庭見物の件数を表2に示す。

表－２ 六義園見物の件数

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
安永2					4	3		3	1	4			15
安永3	2		4	2		1		1	1	2			13
安永4		2	4	7	4	1	1	2	9	3	4	2	39
安永5	1	6	6	3	1	2	1		3	3	1	1	27
安永6	1	4	12	5	2	1	10		3	3	2	1	44
安永7			4	8	3		1	1	5	6	5	2	37
安永8	3	5	12	4	3	2	5	3	2	8	1	1	49
安永9	1	5	25	13	7	3	12	6	10	47	3	1	134
天明1	2	7	8	18	12	7	3	6	3	11	20	1	98
天明2	1	5	29	20	7	8	4	8	9	32	1		124
天明3	3	5	16	41	19	12	3	6	6	29	5	2	147
天明4	1	7	3	47	10	3	9	9	7	10	13	2	122

一件あたりの人数は異なるので、件数の増加が直接見物人の増加につながるわけではない。だが、その点を考慮しても、次第に庭見物の人々が増加する傾向にあり、安永9年（1780）を境に激増することが見て取れる。

安永9年（1780）から天明3年（1783）まで、信鴻は、園中に菊花壇を設ける。この花壇は、菊作りの専門家清川馬龍に依頼して設けた本格的な花壇であった。安永9年（1780）10月の見物件数の多さはこの菊見物の人々の多さを示す。この年は9月の半ばから11月始めまで見物人が絶えず、10月20日には、「其余見物数十人来る」と記すほど大勢の人々が訪れた。この年10月8日、馬龍に贈った歌の詞書に「わか園のうちに色々の菊を移し植たるか世に稀に咲揃ひ年に稀なる人さへつとひ来りて嘗物し侍る」と記しているところを見ると、信鴻は自慢の菊を見せるため方々へ案内を出し、見物を誘ったのであろう。

しかしながら、見物人の増加の要因は菊花壇だけとも考えがたい。安永9年（1780）は3月と4月を合わせた件数も、前年の同じ月の倍以上に上っているからである。また、馬龍が菊花壇から手を引いた天明4年（1784）にも見物人のきわだった減少は見られない。それに、安永9年（1780）以降は、件数が増加するばかりではなく、見物に訪れる人々にも変化が認められる。

安永8年（1779）と安永9年（1780）の見物人の内訳を比べてみるとその違いは歴然とする（表3）。安永9年（1780）には、前年にはほとんど認められなかった信鴻と直接関係のない部外者の庭見物が多くなり、天明3年（1783）になると、部外者は、信鴻関係者の件数に匹敵あるいは上回るほどに増加する。さらに、一組の人数が増えることも指摘できる。

菊花壇も4年目となった天明3年（1783）の、信鴻の関係者以外の見物人を例に、見物人の広がりを見てみたい。まず武家では、3月に藤堂山城家中二人、土居家中五人、4月に下谷御徒士、追分与力、細川能州臣五人、新屋敷御番衆家内・老尼婦人少女僕、久留米家中、巣鴨旗本家内女上下十四五人・侍四五人・医者一人等、5月には藤堂家中武士二人・尼一人・女六人・児四人・僕一人、10月には雪川母公・女中二人・侍四五人と、11月には、洞津侯家中黒柳佐助の家族十三人といった人たちがいる。雪川は松江藩主松平治郷の弟衍親の俳号である。諸侯の室、他藩の藩士、旗本、幕府の様々な役職にある者が訪れている。仲間同士もあれば、女子供連れもあり、召使いを交えた家族での見物もある。十人以上のグループの存在にも注目させられる。

町人では、3月に、春木町町家婦人三人、吉見屋藤兵衛外七人、4月に本郷三物屋倉田屋仲間五人、岡野屋銀八手代三人客一人、伊勢屋宗次郎手代四人、片町清水屋家内婦人三人・小女一人等、前町婦人十余人、片町の者十五人、あるいは、京橋簪問屋家内女六人・男四五人・子供三人など、五月には日本橋町人婦人四人、6月には土物店仕立屋と蔵前米屋五人、8月には目見を訪れた町家の娘三人に付き添いの母親や供の者、11月に伊勢屋七兵衛家内女七人・小女二人・僕三人といった具合である。本郷、蔵前、日本橋や京橋からも人々が見物に訪れており、同業者仲間、家

表－３ 見物者内訳

信鴻関係者					部外者				
藩士及び その親族	使用人の 近親者	友人等	不明		武家	町人	農民	混合	その他
安永8年									
1	●	●	●						
2	●●	●●	●						
3	●●●	●●	●●●●●●	●●					●
4	●	●	●					●	
5			●●						
6		●●							
7	●●	●●	●						
8	●●●								
9			●	●					
10	●	●●●	●●●●						
11			●						
12			●						
安永9年									
1									●
2	●●●	●	●						
3	●●●●	●●●	●●●●●●	●	●●●●●●●●			●	
4	●●●●		●●●			●		●	
5	●●	●●	●●						●
6	●●		●						
7	●●	●	●●●●●●	●●	●		●		
8	●●	●●	●						●
9	●●		●●●	●●					●●
10	●●●●	●●●●	●●●●●●	●●	●●●●	●●●●			●●●
11	●●●●		●●●●		●	●●●●			
12	●					●			
天明3年									
1	●		●	●					
2		●●	●●		●	●			
3	●●●●	●●●	●		●●●	●●		●	●
4	●●●●	●	●●	●	●●●●	●●●●		●	●
5	●●●●	●	●●	●	●●●●	●●	●		●●
6	●●●●	●	●		●	●●●	●		●
7	●●				●				
8	●		●●●	●					●
9	●●				●●●	●			
10	●●●●	●●●	●●●●		●●●	●●●●			●●
11	●●		●		●	●			
12	●	●							

族で、女たちだけでと、グループの構成もまちまちである。土物店仕立屋のように職人一人での見物もある。

この年の見物人の中には、5月に練馬村の名主の息子、6月に岩槻の名主とその同行者といった農民の姿も認められる。数は少ないが、農民が見物に訪れることもあったようで、安永8年（1779）に下村の百姓（7／5）、天明元年（1781）に岩槻の百姓藤助（10／10）、天明2年（1782）には相模領奈良村名主（2／23）と左内坂名主（3／28）が日記にはしるされている。農民の見物人は、名主とその家族が多いこと、江戸以外の地からも訪れていることが特徴である。

見物者数増加の直接の原因ははっきりしない。しかしながら、安永の頃から江戸で郊外の遊覧が盛んになることとの関係は一考に値する。この頃から遊覧暦の類も次第に版行されるようになるが、この種の遊覧暦の最初だとされる『草木花暦江都順覧四時遊観録』の版行は安永5年（1776）である。そしてこの花暦は、菊の項で「巣鴨を当時第一とす、植木屋園中也、所は加賀守中屋敷の前」と、駒込の下屋敷に隣り合う加賀藩中屋敷の門前に並ぶ植木屋の庭を菊の名所にあげている⁷⁾。菊以外にも、飛鳥山、西ヶ

原牡丹屋敷、染井植木屋の園中と見所の多い六義園の周辺は、当時遊覧の場所として知られるようになっていた。したがって、この地を訪れる遊覧の人々の増加と共に、六義園の見物に訪れる人々も増加したことは、十分考えられるのである。

安永7年(1778)9月30日の「薪屋銀八家内不残園中見物に来」と、安永8年(1779)3月24日「舞冷・雨秀家内同道園中見物に来る(中略)舞冷家内男女上下五十人七半頃客皆帰る」に、この頃信鴻の関係者の六義園見物も遊覧の性格を帯びてきたことを窺うことができる。薪屋銀八は妙義坂の植木屋で信鴻とは親しい間柄である。その植木屋の家族が総出で「庭見物」に訪れている。舞冷・雨秀の人物は特定できないが、こちらも奉公人を含む家族連れで、50人ほどにも上る人数が夕方5時頃までまで庭で過ごしている。安永4年(1775)に見た、数人で庭を巡る庭見物とは明らかに異なる庭の楽しみ方である。

また、安永8年(1779)5月11日に「松屋市衛門来、連二人児輩一同道園中見する(中略)今日王子参詣にて立寄し由」、また天明元年(1781)9月19日「秀来る、柚貫ふ母同道王子へ行し由、庭を見物」と、王子への途中に立ち寄る者の存在を日記は記し、六義園が王子飛鳥山の遊覧ルートに組み込まれていたことを窺わせる。

一方六義園においても、信鴻の移転以来絶え間なく続いた園の整備が一応終わる⁸⁾。庭見物の人々を受け入れる状況が整ったと見ることもできよう。安永9年(1780)2月に、水分石の橋付近に藤棚を設け、翌天明元年(1781)10月25日に「六義園絵図に合せ、所々の名を札にかき」、11月24日には「今日より園中名所碑石所々建る」と、吉保の定めた景を園内に復活させている。菊花壇の設置と共に、見物人を意識した備えとも考えられる。

さらに、当時個人の庭が名所として、遊覧の人々の訪れる場所となっていたことも理由のひとつに数えられるかもしれない。先の花暦は、牡丹の名所に西ヶ原牡丹屋太左衛門園中の花壇を挙げ「尤売物ならねばみだりに入れず、勝手より案内を乞いて見物すべし」⁹⁾と、個人の庭も案内を請えば見物できるとする認識があったことを伝える。大名屋敷と一般庶民の庭を同列に考えるのは無理があるとしても、「案内を乞いて」見物する点で、六義園の見物は、この系列に連なる庭の楽しみ方だと見ることもできる。水戸光圀の事跡を記した『西山遺事』に後楽園について、「賤敷者ニテモ御園一見ヲ望候へハ誰トナク御見セ候故、酒肴ヲ携来り御園ニ遊ヒ申者」年間を通じて絶えなかったとしている¹⁰⁾。したがって、江戸の一般の人々が大名の庭を見物することは、例のないことではなかったのである。

4. 灌仏の庭開放

4月8日の釈迦の誕生日には下屋敷の龍華庵でも灌仏会が執り行われたが、この日にはまた、家中の婦人たちに庭を開放した。駒込移転後最初の灌仏会である安永3年(1774)4月8日には、「九過より龍華庵灌仏会に行、(中略)家中婦人参詣、庭をみする」と、参詣に来ていた家中の婦人達に庭を見せたとだけ記されている。翌年には「今日灌仏故家中の妻子へ庭を見せる」と、庭の開放が灌仏会を理由とすることが述べられる。さらに、安永5年(1776)の日記は、この日の庭開放が龍華庵の恵三の願いであることを記している。また、翌安永6年(1777)には、龍華庵庵主の「白堂より甘茶来、家中婦人園中見物願申来」とあるので、この庭解放の願いは、恵三の個人的な願いというより、龍華庵からの願いであると考えられる。

天明2年(1782)には、「如例年家中婦人園中見する、清兵衛願ひ、前町の者共園中へ入る」と家中の婦人ばかりでなく、出入りの植木屋の清兵衛の頼みで屋敷前の町屋の住民も庭見物に訪れるようになる。翌年の4月8日にも「前町婦人十余人供男女五六

人」、天明4年(1784)には、「灌仏につき家中前町の婦人に園中見する」と、その後も前町の婦人が見物に訪れている。

ところで、安永4年(1775)4月8日の日記には「灌仏会につき伝通院護持院等庭をみする日ゆへ」と、この日が庭を見せる日だとする記述が認められる。信鴻はこの日、息子の米社と珠成を伴い、下屋敷近くの庭を見て歩いている。

護持院について、享和3年(1803)年版の『増補江戸年中行事』4月8日の条は、「釈尊たん生、諸寺院参詣、●護国寺山開き」¹¹⁾とあるだけで庭にはふれていないが、『東都歳事記』は、「大塚護国寺(護持院庭中山びらきあり)」¹²⁾と、山びらきとしての庭解放であることを記している。同書は3月21日の条にも、「大塚護国寺 今日護持院山開きあり、見物をゆるす」とあり、ならべて、「深川永代寺 今日より四月十五日迄、庭中見物をゆるし、貴賤日毎に群衆す。是を山開きといふ」¹³⁾と、庭見物が山開きと呼ばれたことを記している。庭と山との関係は後考を待ちたいが、以上の記事により、弘法大師の命日の3月21日からしばらくの間と釈迦の誕生の日に、いくつかの寺院では庭を解放する風習があり、六義園でも、その風習に従い、庭の見物を許したと見ることができる。とするならば、信鴻の移転以前から、灌仏会にともなう庭見物は行われていたとも考えられる。

5. 園中を貸す

安永4年(1775)に珠来の一行が、信鴻抜きで庭を楽しんだことはすでに見た。安永3年(1774)10月28日にも「今日兼而約束のこく秋園中へ来へき由にて、今日留守に八半頃来(中略)菊堂同道にて来、暮過かへる由」と、信鴻の留守に俳諧の宗匠菊堂の一行十人ほどで訪れたとあり、俳諧仲間自由に庭を使わせることがあったことが知れる。安永8年(1779)になると、3月5日に「八半頃より菊堂・布沢其外塵梁尼介兄輩召連来、園中を貸し茅屋にて日暮迄遊び帰る」と、「園中を貸し」の言葉が現れる。この年には4月16日にも、「松悦小舅・侍三四人・町人二三人園中見物来り茅廬貸す」と侍医の松悦に園内の亭を貸している。この両日ともに信鴻は在宅していたが、見物の人々には会っていない。天明元年(1781)4月24日には、息子の米社が庭の借り入れを申し入れており、翌天明2年(1782)3月5日には「近侍の者共へ園中貸し遊ばしむ」と、近侍の者たちの慰労にも、「園中貸し」の言葉が認められる。

親しい家の庭で一日を自由に過ごすことは、ほかでも行われていたらしく、時代が下るが、天保年間、九段坂下に屋敷のあった旗本の婦人井関隆子は、親類の旗本の下屋敷に家族総出で出かけ春の一日を過ごしたことを、その日記に記している。同書によると、天保11年(1840)3月21日、「かなたよりも花紅葉のをりを遊び所に物せよとあれば」、高田の新見正路の下屋敷に子供を含めた家族一同で出かけ、園内の蕨取りや風揚げに興じた後、亭で弁当を開き酒を飲み、夕方まで遊んだというのである¹⁴⁾。

井関隆子の場合は親類であるので、所有者との関係が密な場合に限られるのであろうが、他家の庭を借りて、大勢が自由に過ごす場合があったことを、この例は示している。

6. 「願」による見物

信鴻と直接関係のない者たちの庭見物が増えるにつれ、日記中には「同道」「案内」「願」「世話」「取次」といった庭見物の仲介者の存在を指す言葉が現れるようになる。柳沢家と直接関係のない者達は、仲介者を通じて、庭を見物した。仲介者となるのは、まず、家臣である。安永9年(1780)に見ると、

- ・松本願ひにて建部氏奥女園中見する(3/12)
- ・浅田新治園中見する、溝口伊三郎・源助等同道[本郷御弓町同心溝口等太鼓師匠](3/17)

- ・和助願ひにて婦人二人、少女一人園中見する（5／20）
- ・御家人近藤円次郎・同字八・高野理衛門、松悦同道園中見する（10／20）
- ・土居能州医師伊藤宗陸園中見する、米魚案内（11／3）
- ・下山案内出家二人、士一人園中見する（11／5）

と、年間を通じて、家臣の仲介による見物人がある。それぞれに仲介者が異なるので、仲介を行う人物は特に定まっていなかったことになる。この年には、「蔵持遠類越後侯臣二人来、園中見する（7／9）」「山本遠類婦人二人園中見する（8／20）」といった記述もあり、知りあひばかりでなく、血縁関係をたよりに見物に来る者もいたことになる。

和助は身分ははっきりしないが、庭仕事に従事したり使い走りをする奉公人だと思われる。また、松悦は侍医である。身分や役職に関係なく、庭見物の仲介は行われていたらしい。見物に訪れるのは、奥女中、他藩の藩士、御家人などで、婦人だけの見物もある。播磨麻田藩建部氏の奥女中は藩士の妻の妹が建部氏の奥に仕える縁で見物に来たのだという。太鼓の師匠や遠い親類など、つてを求めて人々は見物に訪れたのである。

また、安永9年（1780）3月14日には「鈴木屋せい同道にて近所町家の妻女八人園中見物に来る」とある。鈴木屋せいはい出入りの町人としかわからないが、近所の女達を連れて見物に訪れている。このように、出入りの町人が仲介役をつとめることも多い。天明元年（1781）7月23日には「市右衛門来る、〔又こもち眼九也〕恵比須や九平次〔鮎屋〕宇野庄六〔醬屋〕同道園中見する（中略）眼九等八辻案内にて園中廻り、市衛門ひとり菊壇の前に待居る故行て逢ふ」と昵懇の芝居茶屋松屋市衛門の知り合いを藩士が案内したことを記している。

何組もの見物人を案内する者もいた。伏見屋与兵衛にその例を見ることができる。彼はまず天明2年（1782）10月9日に伊勢屋、西宮屋、鈴木玄悦、婦人一人を案内し、25日にまた、今度は伊勢屋、西宮屋、鈴木玄悦の家族に二家族を加えた「男女老少二十三人」を伴っている。9日に見物に来た者の評判を聞いて、家族が庭見物を希望し、伏見屋に再度の仲介を依頼したのであろう。彼は翌天明3年（1783）にも3月8日に吉見屋外七人、4月19日に町家婦人六人、6月13日に蔵前の米屋五人の三組を案内している。柳沢家と関係の深い特定の人物が仲介者として名を知られていたらしくことを窺わせる。

見物に来た者が新たに仲介者となることもあった。天明4年（1784）3月6日「袖岡前婢願にて永井三郎兵衛主従四人」と、侍女袖岡の以前の召使いの願ひにより園中を見せたのだが、19日になると、永井三郎兵衛の妻より袖岡に手紙で「傍輩数人永井案内にて来度由」と庭見物の申し込みがあり、承知すると、その日の昼過ぎに、永井三郎兵衛の案内で「主人四人僕四人」が庭見物に訪れたというのである。この場合は、侍女を通じた女性同士のつながりで仲介がなされている。

このほかにも、菊作りの馬龍の案内で天明元年（1781）10月3日には「中谷後家其外数人園中見物に」訪れ、天明2年（1782）10月9日には信鴻の俳諧仲間西ヶ原で茶店を営む笠志が「洞津侯家中曾郷喜太郎・藤山長太夫・婦人二三人」を案内し、天明4年（1784）3月8日には、「藤都願ひにて旗本衆後室・婢六人・侍三人・医師一人・僕三人園中見する」と、芸人の藤都の願ひ出で旗本の婦人の一行が訪れている。

植木屋の清兵衛もたびたび見物人を案内している。まず、安永8年（1779）2月10日には「清兵衛姪十畳村より来る、園中見せ甘糕遣へす」と、十畳村から来た姪が、また、安永9年（1780）10月には、3日に「清兵衛妻等四五人」、11日に「清兵衛近所の者四五人」と、家族や近所の者たちが菊花壇を見に訪れている。翌天明元年（1781）10月3日にも「前町の町人一人婦

人五人」が清兵衛の世話で見物した。清兵衛が案内するのは近所の者ばかりではない。天明2年（1782）に、越後屋手代（3／29）、両国呉服屋升屋越後屋手代等（9／13）、天明3年（1783）には日本橋町人婦人（5／7）と、日本橋や両国の町人を案内した。また天明3年（1783）3月11日には「御供の御鳥見八九清兵衛を以庭見度由言込しか来らす」と、鷹狩りの供の庭見物の取次をし、4月12日には新屋敷大番衆岩間半十郎家内、10月20日に藤堂家中黒岩文蔵と、旗本や他藩の藩士を案内している。天明4年（1784）3月19日には、洞津家中三人・僕七人に清兵衛の願ひで庭を見せたが、この時信鴻は、「若殿と見え婦人六七人刀なと持来る」と、見物の様子を観察している。

このように、清兵衛は、土地の者達の見物を促しているばかりでなく、日本橋や両国の商家の婦人や奉公人、医師、他藩の藩士、幕府の役人と多岐に渡る人々を案内している。彼は植木屋として六義園以外の場所でも働いていた可能性はあり、これら多様な人々は、庭仕事で出入りする家の関係者とも考えられる。

信鴻周辺には、家臣や奉公人の外に、出入りの商人や職人、趣味の仲間、芸人などが常に出入りしていた。これら、身分も職業も異なる人々のネットワークが、様々な人々を六義園に誘ったのである。

庭の見物の願ひは、天明2年（1782）10月7日に「河野宗阿弥来らば園中見せたき由中島申聞、見すへきと申付る」とあるように、前もって告げられる場合もあれば、その場で願ひ出る場合もあった。

次の諸例は、比較的簡単に庭を見ることができたらしくことを窺わせる。まず、安永9年（1780）3月19日、八つ頃峠が「口哲、家内親族召連鶯裡方迄来り、園中見度由願ふにつき使来り」と口哲が庭見物を希望していることを知らせに来る。承知すると、「八過鶯裡案内にて口哲家内女五人男六人園中見する、七過帰る」と、ほどなく家族10人ほどが見物に来て、2時間ほどで帰っていった。口哲も鶯裡も人物を特定できないが、鶯裡は長屋に住む藩士の一人であろう。花見の時期でもあり、六義園の見物を目当てに鶯裡方を訪ねたとも考えられる。

また、天明3年（1783）3月15日には、「下山嫁の見出家医師等同道庭見たき由願ふ少し待へき由申遣わせしに帰りし由」と、順番を待ちさえすれば当日の願ひでも庭を見物できたことを示している。それは、この年10月15日にも、「向晩お隆と園中閑歩、中村来、森・大井家長園中見たき由願ふ故見する」と隆との散歩の途中で庭見物の希望を聞き、受け入れていることにも現れている。

さらに、安永9年（1780）3月12日の「町人一人庭見にきたり、予を見て隠る、故木村に案内させ見する」とある記事は、本人が直接訪ねてきて庭を見せたように受け取れる。しかしながら、願ひ出れば誰にでも見せたわけではなかったことは、天明4年（1784）5月17日に「上郎より松平和泉・松平左京亮当月末に園中へ同道にて来度由申来る、所々断る故難波申遣へす」と、米徳からの依頼を断っていることにもあらわれている。「所々断る」とあるから、断られる者たちも少なくなかったことになる。米徳が申し入れた時期には庭の見物人はいないので、見物人の多さが断る理由ではない。このことは、庭の見物は、あくまでも、信鴻の意向によることを示している。

ところで、つてを頼って庭見物を行うことは、当時、普通に行われていたようで、信鴻自身、他家の庭をつてを頼って見物しようとしている。天明3年（1783）10月4日、福山藩の下屋敷の菊を見たいというので、家臣を下屋敷に住む彼の俳友のもとに「談合に遣」わしたが、藩主の来館と菊の献上がまだ済まないことを理由に断られた。また、天明4年（1784）10月3日遊歩の途中「阿部侯御部屋隠居所にて溝口を遣し菊を見んと申遣せしに見せず」と、こちらも断られている。もっとも、この庭の菊は、

安永6年(1777)10月に「阿部勢州侯内称の菊を見る、花壇三間計座敷二間庭造樹等あり」と、一度見物している。したがって、相手の都合で断られることもあるが、庭見物の申し入れは自由にでき、見物できる場合も多かったと考えられる。

7. おわりに

六義園は、江戸の大名屋敷の例にもれず外部に対して閉じた空間であった。しかし、願い出れば、庭を見物することができた。特に安永9年(1780)以降、庭見物の人は増加する。園内に菊花

壇が設けられ人々を誘ったことも増加の要因であろうが、江戸近郊の遊覧が盛んになり、六義園が郊外の遊覧地に位置していたことも大きな理由であろう。

見物を希望する人々は、藩士や出入りの町人、庭師といった仲介者を通じて庭を見物した。仲介者に応じて、訪れる人も様々であった。見物は誰にでも比較的容易であったようだが、下屋敷の関係者とながりのある人に限られ、その選定には、信鴻が直接関わっていたようである。それでもなお、庭は、大名屋敷に外部の人々を導き入れ、外部社会と交わる装置であったと考えられる。

注および引用文献

- 1) 宮崎勝美(1994): 大名江戸屋敷の境界装置: 武家屋敷-空間と社会: 山川出版社, 22. なお同書は、境界装置としての表長屋について、「表長屋は、そこから彼らの日常生活がにじみ出し、外部の都市社会と交錯する部分を併せもつものでもあった(p24)」と、大名屋敷の内から外へのにじみ出しの装置として表長屋をとらえている。
- 2) 芸能史研究会編(1977): 日本庶民文化史料集成 13: 三一書房。なお断りのない

- 限り、六義園に関わる記述は同書による。
- 3) 吉田伸之(1988): 近世の城下町・江戸から金沢へ: 週刊朝日百科日本の歴史別冊「歴史の読み方 2 都市と景観の読み方」: 朝日新聞社
- 4) 佐藤昌(1977): 日本公園緑地発達史(上): 都市計画研究所, 13-14
- 5) 南紀徳川史 2 (1970): 名著出版, 874
- 6) 齊藤月岑(1848): 武江年表: 江戸叢書 12: 江戸叢書刊行会, 170
- 7) 草木花暦江都順覧四時遊観録: 三田村篤魚編 江戸年中行事: 中公文庫所収

- 8) 小野佐和子(1999): 柳沢信鴻の隠居所としての六義園: ランドスケープ研究 62(5), 417-418
- 9) 前掲注 7
- 10) 吉永義信(1938): 後楽園雑考: 造園研究 25, 11-12
- 11) 増補江戸年中行事(1803): 前掲中 7
- 12) 齊藤月岑: 東都歳事記 2: 平凡社東洋文庫
- 13) 同上 1
- 14) 井関隆子日記(上)(1978): 勉誠社, 102-106

Summary : This paper deals with Rikugien in terms of “vist to the garden” in the late 18th centry. Rikugien was a garden of Nobutoki Yanagisawa’s residence and located in the suburbs of the city of Edo. He lived there after his retirement in 1773. Nobutoki occasionally showed his garden to his vassals and thier family, the family of laidies in waiting and maids, his friends and others. Outsiders who wanted to see the garden asked to permit through an intermediary; the staff, his friends, and the merchants and workmen who worked for him. The garden accepted various visitors into the residence that usually closed to the outsiders. The number of visitors increased after 1780 when Nobutoki made a chrysanthemum bed in the garden. This time corresponds to one when outings to the suburbs became popular in the city.